

【発表 NO.15】

実践発表

多文化ルーツを持つ子どもたちとの「アイデンティティ授業」
—“言葉づくり”の土台となる“自分づくり”ができる学校の世界を目指して—

阿部 サクラ アレクサンドラ 愛美 （沖縄県宜野湾市立長田小学校）

1. 実践の場

「アイデンティティ授業」は、通常学級や特別支援教室を含む、あらゆる子どもたちと実施可能な実践である。本発表では、今年度実践者が立ち上げた沖縄県宜野湾市立長田小学校日本語国際アイデンティティ教室での取り組みを紹介する。

本教室には、アメリカ、アフガニスタン、南アフリカなど、多様なルーツをもつ児童 21 名が在籍している。単なる日本語指導の場にとどまらず、学校内における多文化共生の拠点となることを目指して運営している。4 月当初、多くの児童は豊かな日本語の力を持ちながらも、学習や人間関係、自身のアイデンティティに自信を持てずにいた。中には、思いや考えを言葉で表すことが難しい児童、問題行動を理由に「問題児」と見なされていた児童、過去のいじめ経験から学校に希望を見出せない児童もいた。

2. ねらい

中央協議会（2021：70）は、「日本語指導が必要な外国人児童生徒等が将来への現実的な展望が持てるよう、（中略）子供たちのアイデンティティの確立を支え、自己肯定感を育む」と述べている。教師には、日本語指導と並行して、児童生徒が自らの価値を認められるようなアイデンティティ形成を支えることが求められている。また、文部科学省（2017）は、『【特別活動編】小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説』にて「学級や学校での生活づくりに主体的にかかわり、自己を生かそうとするとともに、希望や目標をもち、その実現に向けて日常の生活をよりよくしようとする。（p.60）」と示している。さらに、「互いのよさを見つけ、違いを尊重し、信頼し合って生活すること。（p.54）」の重要性も述べられている。つまり、児童生徒は自己実現へ向かう存在であり、その基盤として自己理解が重要であると考ええる。また、互いのアイデンティティや強さや弱さといった、より深いところでの他者理解を深め合い、関係構築につなげる必要がある。

本実践のねらいは、児童が「どこで誰といても、自分自信を否定せずに受け止める自己形成（アイデンティティ構築）」の力を育み、それを土台として言葉づくりや他者との関係構築などにつなげることである。その根幹には、幼少期から世界を移動し現地語を学んできた実践者本人の体験に基づく「言葉づくりの前に自分づくり」という考えがある。

実践では、問題行動やレッテル貼りがある児童に自己を表現してもらい、それがどんな内容であれ最初は必ず肯定することで、「自分らしさ」を否定しなくなることを目指した。また学習面や言語習得で行き詰まりを抱えている児童には、その教科での困り感を引き出し、本人の「自分は勉強./日本語ができない」という誤解が「心の停滞があるから勉強がうまく進まない」という捉え方に書き換わることを目指した。

3. 内容

本実践では、アイデンティティワークシートという教材を用いて、児童生徒らに内観の作業をすることを促す。このシートでは、時や場所、共にいる人などで変化する自分のアイデンティティ

ィ（心の形）を見つめなおしながら、「外側の自分/内側の自分」を絵や文字などを使い自由に表現する。シートは 3 種あり、二つの円に「学校にいるときの自分」「家にいるときの自分」を記すタイプ、場面を自由に設定できるタイプ、円の無いタイプがある。児童生徒は、自分がかきやすいタイプを選ぶ。

本実践の流れは、まず授業者がアイデンティティシートを用いながら、自身のアイデンティティについて児童生徒へ紹介し、アイデンティティとは何かについて考えるところから始まる。次に、児童生徒はそれぞれ自分のアイデンティティシートを使って内観を深め、最後に希望する児童数人に、シートを全体へ向けて共有してもらうことで、他者のアイデンティティを知る体験ができるようにする。また授業者は、机間巡視の中で内観を支えるための問いかけや、児童生徒のかける範囲を尊重して安心感を与える声掛けを行う。発表の形式なども含めて、児童生徒に強要せず、委ね受容する関わりが求められる。授業後には、授業者がワークシートへさらに内観を深めてほしい点や課題の乗り越え方についてコメントし、児童がそれをもとにして再び自己対話を行えるようにする。実際に子どもがかいたアイデンティティワークシートは発表時に提示する。

本授業は年間を通して行った。特に、4 月や学期はじめ、終わりなどの節目には必ず行い、トラブルが増える 5 月、6 月にも並行して行った。また、日本語学習の中で習得が難しい場面や、教師と児童の関係の確かめが必要だと感じる場面でも、児童が自身の現状を知る方法として取り入れた。

4. 効果

実践を通して、児童らは「どんな自分も自分」だと捉えられるようになり、アイデンティティへの自信を少しずつ貯めることができた。自分の思いを言葉で表すことが難しかった児童は、アイデンティティワークシートを通して、声ではない表現の仕方を自分で作ることができた。また、問題行動のみられた児童は、自己否定や自罰が減ったことで、担任やクラスメイトへ向ける言葉や思いが柔らかくなっていった。学習面や言語で息詰まっていた児童は、「教科と向き合う前に自分自身と向き合う」という姿勢が生まれたことにより、それまで参加できなかった教科の授業に参加できるようになった。

また、本授業は、形や環境を変えて外への広がりを見せた。例えば「アイデンティティカード」や「アイデンティティ新聞」である。児童は自分のルーツや言語、強さや弱さといった自分らしさを、文字や写真、絵など様々な方法で表現し、それらを日本語教室前の掲示板や所属学級の教室などに掲示した。また、日本語教室での発表を、所属学級や、学校内で児童らのかかわりの深い教職員などにも伝えられるようになった。その結果、日本語教室外の児童らからも「自分もやってみたい」という声が上がリ、活動は波及していった。

児童の自分づくりは、日本語指導での言葉づくりと同様に、期限がないため、児童の心の変容を丁寧に見取りながら、自分づくりや言葉づくりにつながる様子を見守る。

【引用文献】

中央協議会（2021） 「「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」

文部科学省（2017） 『【特別活動編】小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説』